Ⅴ．施設計画の考え方

１．外部計画

斎場は、遺族や会葬者にとって故人とお別れをする大切な場所である。

本来斎場がもつべき別れの場、葬送の場となるように配慮し、周辺との調和を図るため敷地周囲に植樹帯を設け、建物の高さを抑えるなど景観に馴染むように配慮する。

２．空間計画

斎場で行われる葬送行為は、その地域での慣習、設置者の考え、宗教儀礼などにより一様ではない。斎場の空間計画は、一連の葬送行為を行うことができる場所を設けるとともに、それぞれに要求されている豊かな空間を造りだす事が不可欠である。

外部空間、建物の外部デザインはもとより、内部空間としては、特に車寄せ及び玄関、告別スペース、炉前及び見送りスペース、収骨スペース及び待合室などの諸室について留意する必要がある。

空間計画にあたっては、その地域の現状を把握することが大切で、斎場に要求される機能を理解したうえで、葬送の場としてふさわしい内部空間計画が求められる。会葬者が利用する空間については、ユニバーサルデザインに配慮し、だれでも使いやすい施設とする。

① 車寄せ・玄関部分

斎場へは霊柩車を先頭にバスや乗用車で到着する場合が多い。柩、遺族や会葬者の他、僧侶などを帯同したり、遺族のサポートのため葬儀業者も同行する。そのため、車寄せの庇を大きくゆったりと設け、雨天時にも、車両の乗降に支障がないように計画する。

車寄せからエントランスホールの床は柩を載せた運搬車が移動するため、段差の無いことが望ましい。会葬者には高齢者も多く、車の乗降をしやすくするとともに車椅子の利用があることも考慮する。（写真１・2）

写真 1 大屋根方式とした車寄せ（三次市斎場）

写真 2 段差が無くフラット化された床（音更町火葬場）

② 告別・見送り・炉前・収骨スペース

告別室と収骨室は設けず、炉前ホールと一体化させ待合部分を含めユニット化する。会葬者全員が幅とゆとりをもって集まることのできる十分な広さを確保する。

炉前ホールは柩（遺体）との最後のお別れの場となるため、葬送の場にふさわしい質の高い空間設計が求められるが、華美過ぎないようにするとともに、公共施設であるため特定の宗教・宗派の様式に偏ることは避ける。

内部の仕上げとして、火葬炉が並ぶ処理場的なイメージをなくし、明るく開放感が感じられる空間とする。（写真 3・4）

写真 3 ユニット化し多様な葬送形態に対応（三次市斎場）

写真 4 トップライトを設けた炉前（越生斎場）

③ 待合室・待合ロビー

待合室は椅子を主体とした洋室とし、木材を使うなど明るく暖かみを持たせ、庭が望めるなど落ち着いた空間とする。

待合室で飲食を行う慣習があるため、飲食がしやすいよう給湯室等を設ける。

心安らぐ空間を設けるとともに、今後、多様化していくことが想定される葬送形態に対応できるよう、待合室及び待合ロビーは極力フレキシブルな使い方ができるよう考慮し、将来の会葬者数の減少への対応など改修がしやすいようにする。

売店の設置や静かに待ちたい会葬者への対応など、多様な待合場所を検討するとともに、くつろげる空間を検討する。（写真 5・6）

写真 5 木材を使い暖かみある待合室（秩父斎場）

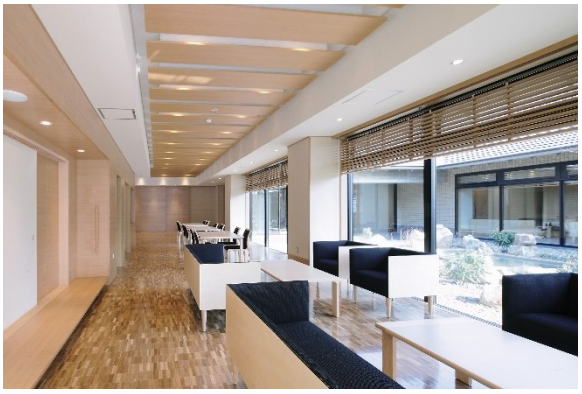

写真 6 フレキシブルに使用可能な待合（三次市斎場）

④ キッズコーナー・授乳室

小さい子供がいる会葬者のために、キッズコーナーや授乳室を設置する。

授乳室はプライバシーが守れるよう個室とし、キッズコーナーは他の会葬者の心情に配慮して、防音対策を行う。（写真 7・8）

写真 7 独立空間のキッズコーナー（音更町火葬場）

写真 8　個室型とした授乳室（三次市斎場）

⑤ 小動物炉

小動物炉を設置する。一般会葬者とエントランス及び動線を分離して配置し、専用の入口を設ける。（写真 9）

写真 9　小動物火葬専用の入口（広島市西風館）

⑥ 事務室・作業室・制御室

事務室は、敷地全体、会葬者の出入口や葬送の動きを把握できることが必要であり、適切な位置に配置する。

作業室は、作業環境を良好に保つことが必要であるため、騒音、粉じん、室内温度に配慮する。採光、換気を十分にし、室内の色彩を明るく清潔にし、作業員の作業動線は必要以上に複雑にしないようにする。

制御室は、作業員の動線を考え作業室の一角に設け、できるだけ、操作機器が一望できる位置とする。

３．炉前ホールの検討

火葬タイムスケジュールは、斎場の運営方針に関係する。どのようなタイミングで火葬の受入れを行い、告別と収骨を行うかの検討が必要となる。

必要火葬炉数の他、施設構成や職員の配置にも影響を与える。火葬タイムスケジュールの検討にあたり、炉前ホールの構成を火葬炉１基で一つの炉前ホールを構成する場合と、火葬炉２基で一つの炉前ホールを構成する場合の２種類のパターンについて検討を行った。

それぞれの特徴を図２に示す。

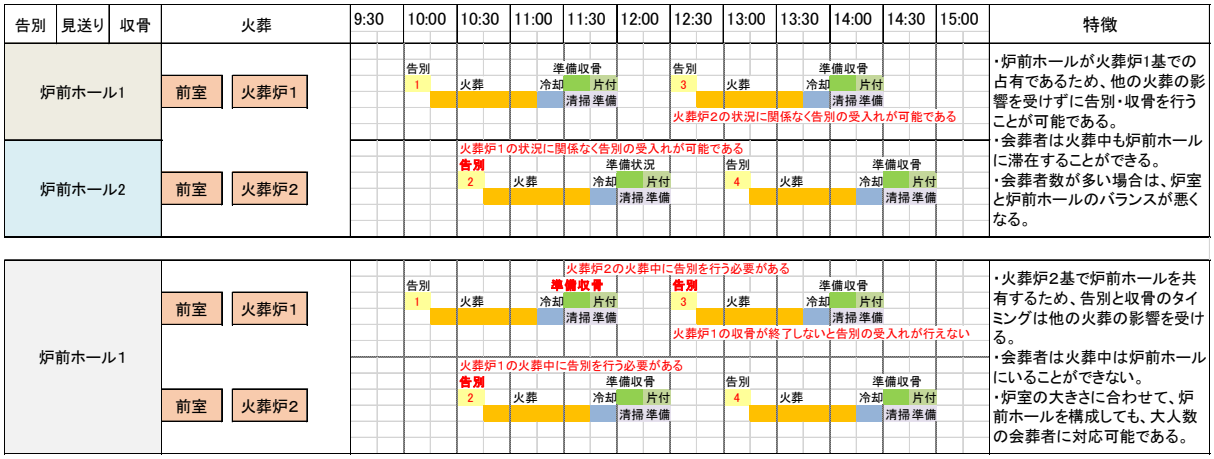

図 2　火葬炉１基と火葬炉２基で炉前ホールを構成した場合の特徴

現在より火葬炉数が増え、同時受入数も増えることになり、また、利用圏域も広がることにより、到着にばらつきがみられることから、火葬の予約時間に対する遅延の可能性も高まる。

１基１炉前ホールであれば、予約時間に対する遅延への対応がしやすくなり、集中する時間帯の枠を増やしやすい。また、他の会葬者の影響を受けないため、火葬中も自由に炉前ホールに行くことが可能である。

斎場だけでお別れを済ませる直葬が増えているが、直葬の際の希望が多いお花入れなどに対する対処もしやすくなり、事情により葬儀が行えないケースにも対応しやすくなる。

想定される会葬者数にも対応可能なため、１基１炉前ホールとして計画する。（写真 10・11）

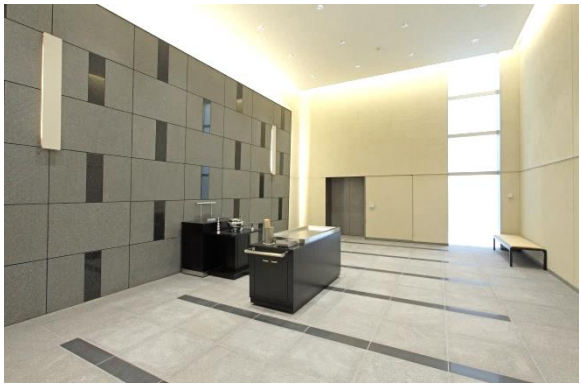

写真 10　火葬炉１基で１炉前ホール（佐久平斎場）

写真 11　火葬炉２基で１炉前ホール（音更町火葬場）